

身
文雄文学全集
第十三卷

丹羽文雄文学全集 第十三卷

献身

一九七五年五月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二番一・郵便番号 一〇二二
電話 東京〇三三九四五二二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません

©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan

(文1)

目
次

装幀・辻村益朗
(写真・一九三八年頃)

丹羽文雄文学全集 第十三卷

献身

献
身

上り特急の九号車は、三分の一ほど席があいていた。柏木啓は窓わくの数字をよみながら、中央にすんだ。自分の指定席は窓ぎわである。通路側に十歳ぐらいの男の子がかけている。少年は、柏木の顔をみあげた。

「じめんよ」

と、柏木は自分の席にはいり、鞆かまもをのみだなにあげ、外套をぬいだ。少年は大きな目で、いちいち柏木の動作をながめている。反対側の席に、三つぐらいの女の子をつれた中年の夫婦ものがいた。少年は、その家族の一員のようにあつた。柏木は東京までのとなりの客が少年でよかつたと思ふ。話しすぎな老人に何かと話しかけられては、迷惑である。大兵肥満の客では、こちらが窮屈になる。婦人客でも困る。どちらも知らない同士がとなりあわせて何時間か汽車にゆられていくのだが、男客とちがひ、女客は必要以上冷淡にふるまふ。男から話しかけられては迷惑という

強烈な印象

思惑からであらうが、あいだに衝立ついでをたてている感じが露骨である。よぎなくからだに触れあう場合にも、柏木はよけいな神経をつかわねばならない。

列車は、安土あづのあたりをはしっていた。琵琶湖びわこがにぶく光っている。列車ボーイがきて、どちらまでかと柏木にきいた。東京と答えると、そばの少年を指さして、

「いっしょじゃないのですね」

「ちがうよ」

少年は、ふたりの会話を顔をあげてきいている。少年には、見るもの、きくものに興味があるらしい。一米七三、六七キロの柏木啓がとなりの客になったことを、神経質に感じている風でもなかつた。自分のとなりにきたひとに、白紙で向かい、関心をもつらしかつた。柏木は、少年が家族のものとすこしも話をしないのに気がついた。家族は、少年をわすれている風である。少年は、新しい童話の本をとりだした。よみはじめたが、すぐ窓外の風物に氣をうばわれる。柏木が、たばこをくわえた。そのけむりが少年の顔の方にながれた。少年は、さもきらいだという風に、大げさに顔のまわりで手をふつた。柏木は苦笑して、けむりがながれないようにする。女の子のように色が白く、可愛い顔立かほだてをしている。何となく少年のようですが自然なのに、柏木は気がついた。落着きがないというのではなかつた。少年がひと口も口をきかないということであ

る。話をしかける相手がいないということであった。そう思ってみると、通路をへだてた夫婦ものは少年と何の関係もない客のようであった。

——すると、この少年はひとりで、大阪から東京に行くのか。

高校生の男の子を、ひとりで関西へやることを心配して、父親がついて行ったという身近な例を、柏木は思いだした。親としては、そこまで心配であろう。しかし、ついていってやりたくとも、ついていけない事情もある。この少年のひとり旅には、やむをえざる事情があるにちがいない。柏木は、何となく少年が可哀かわいそうになった。

昼食の時間が近づくと、食堂の係りが昼食の予約をとりこまわってきた。柏木は、こわった。係りは、少年を無視した。だれかのつれと思つたにちがいないのである。柏木は、列車ボーイに、駅弁とお茶を買うようにと金をわたした。少年は、興味をもつてきいている。少年の気持は、大きな眸まなこが雄弁に語っている。ひとりで東京までいく覚悟には、大人のはかり知れないものがあるにちがいない。ほんやりはしてられないのだ。たえず少年は、気を張っているようであった。三等車にのせず、特二にのせたということからも、少年の親は大事をとっている。少年は、また童話本をひらいた。が、二、三頁ペもよむと、やめた。少年

は時計をもっていなかったが、正午を感じたのであろう。あみだながら風呂敷づつみを下した。弁当箱をとりだして、たべはじめた。おずおずとしたところがなくて、ゆっくりとたべる。終ると、大きな水筒からお茶をのんだ。少年は、親のいいつけどおりに行っているようであった。食事がおわると、果物をとりだした。夏みかんのように大きくて、皮が厚いらしい。少年は皮ぐるみ果物を二つに割ろうとして、力んでいた。はしからむいていけばよいのである。ようやく二つに割ると、

「おじさん、たべない？」

と、柏木の方にさしだした。柏木は少年の手もとをみて、

「ありがたい、いらぬいよ」

少年にしてやられたような気がした。大人の冷淡さで、いままでこの少年をつめたくみていたのだが、少年の方とはなりの大人に親近感をいだいていたにちがいないのである。となりのひとに半分あげるのだと、親にいきかせられていたのかも知れない。それとも少年のこの場の気持から、すなおに半分をさしだしたのかも知れなかった。柏木は自分の態度を悔いた。やさしく話しかけてやるべきだった。十歳のひとり旅の淋さびしさを、なぐさめ、はげましてやるべきだったと気がついた。柏木は、あきらかに一本まいた。少年の態度は、立派であった。が、それをしおに話

しかけるといふことも、わざとらしくてできなかった。少年は話したがっていたのだろう。

静岡がすぎた。車内で、コーヒーを売りにきた。柏木がよびとめた。すると、少年も急にのみたくなつたのだから、自分も買おうとした。

「二つ」

と、柏木がいい、ひとつを少年にわたした。少年は、柏木のあつかいに、とまどつた。少年の方がはやく、のみ終えた。そして、少年は金を出そうとした。

「いいんだよ」

と、柏木がやさしくいった。少年はびっくりしたようだったが、すなおに大人の好意をうけた。金をしまいなおしたのが、ごく自然だった。少年の心づかいにまいていた柏木は、せめて一杯のコーヒーでとりかえしたかつたのだ。

「君は今度はじめて、ひとり東京へいくのか」

「ううん、今度で二回目……」

「ほう！ 感心だね」

横浜をすぎたころになると、少年はあみだなの荷物を座席においた。あちらこちらの席では下りる支度をはじめ

る。

「ホームは、どちら？」

と、少年がきいた。

「東京は右側だよ」

「向うへいっても、いいかしら」

出口に近い席が、あいていた。

「いいよ、空いてる席へうつていて、いいんだよ」

「だれか迎えにきてるんだらうね」

と、柏木がきいた。

「おばさんがきてるよ」

少年は、二回にわたつて荷物をはこんだ。かなりな荷物である。少年では持ちきれない。あとには何ものこつていなかったが、それでも少年は何ものこつていないのをたしかめに戻ってきた。大人のようなこまかい気のつかい方である。柏木は、何となく少年の境遇がわかるような気がした。のんびりと育つた家庭の子供ではないようである。大人のような気のつかい方が、いつか少年の身につけてしまった生活とは、いったいどういふものか。柏木は、少年から目をはなさなかつた。少年はガラス窓に顔をくつつけて、出迎えの親戚しんせきの顔がうまくなさがるだろうかと不安を感じているらしい。ながいひとり旅の最後の不安と向きあっている。すると、スピーカーから車掌の声がながれた。

「……到着ホームは、左側です」

柏木は、意外に思った。たびたびこの特急にはのつてい

で、急に左側にかわつたものか。少年にまちがったことを教えたことになる。せつかく荷物を右側にうつしているのにと、すまなかつた。少年が立ちあがり、柏木の方をなめた。その表情が微笑している。

——おじさん、まちがったね！

柏木は、うなずいてみせた。少年はいそいで、右側の座席においた荷物を左側にうつした。柏木は、少年にいつそ親しみを感じた。列車は東京駅の構内にはいった。列車がとまったとき、ホームは右側になっていた。車掌がまちがったいい方をしたのだ。少年はあわてて、左側の荷物を右側にうつしはじめた。柏木の方をふりかえっているひまもない。柏木は席についたまま、少年が親戚の手にたしかにわたるのを不安のようにながめていた。

少年は、容易に発見されたようである。窓をあけた少年が、荷物をホームのひとにわたしはじめた。出迎えたのは、洋装の若い女の方である。おばさんときいたときから、柏木は何となく四十年配の婦人を想像していた。柏木も立ちあがつた。柏木がいちばん最後に車をでた。少年のすがたは、あたりになかつた。柏木は、少年をさがした。少年と若い女性は、階段を下りていくところである。しきりとふたりは話しあっている。ひさしぶりの邂逅でもあるうか。出迎えた女性は、少年のひとり旅に大きく心をゆすぶられている風である。階段を下りきつたところで、少年

と女性が立ちどまつた。そして、だれかをさがすようにふりかえつた。少年は、階段をいっばいになって下りてくる人の中から、ようやく柏木をさがした。少年は手をあげて、柏木を指さした。が、女性には柏木がわからなかつたもようである。柏木が近づいた。

「このおじさんだよ」

少年が女性に、柏木をはっきりと指さした。ふたりの目が合った。柏木ははっと息をのみこむようにして、見知らぬ女性をみつめた。

「この子が、車中でいろいろとお世話になりましたそれで、ありがとうございます」

と、女性が頭をさげた。つやつやとした、まっ黒な髪に、かるくウェーブがかかっている。ウェーブは髪の黒いつやをひきたてるためのものであった。柏木は、ゆたかで、すなおな髪に印象をつよくうけた。

「いや……」

と、女性の顔にみとれていた。

「おじさん、ありがとう」

と、少年がいった。女性はもう一度おじぎをして、少年をうながして歩きはじめた。柏木は、歩くことをわすれてしまったようである。少年がふりかえる。さそわれて女性もふりかえる。女性は、ななめにおじぎをする。柏木は無意識に、返礼をした。柏木が歩きはじめたのは、ふたりが

かなりはなれてからである。ひとびとのかげで、見えがく
れる。やがて、ふたりは見えなくなった。柏木はしばらく、
夢の中を歩いているような気持だった。ながいガード
をわたり、一番ホームに上ってからも、まだ夢心地であっ
た。現実でない世界をながめていた。夢心地をたのしんで
いるようであった。

電車の中で腰をかけてから、ようやく現実にもどった。

——どういふ色の服だったか。

女性の服が、特別印象にのこるものではなかったが、平
凡でもなかったような気がする。そういう方面にむとん
ちやくな柏木は、シックなかの女の服には気がつかなかっ
た。柏木は、思いがけず心をみだされたのを不思議があっ
た。何か虚をつかれたような衝撃である。すると自分は、
ふだん、無意識のうちにもある型の女性を描いていたとい
うことになる。その型に、少年のおばさんとよぶ女性と思
いがけずあてはまったようなおどろきである。そのような
ことが、この現実にはたしてありうるだろうか。柏木は苦
笑して、首をふる。ふだん心の中に描いているような女性
はいないのだ。女性に対して具体的なこのみはある。が、
特にモデルをつくりあげていたわけではない。

——美貌といえは、あの女性よりも秀れた女性はいくら
もいる。

柏木は、おのれの衝撃をしずめるために、否定的な材料

をあつめはじめた。

——それに、未婚という感じではなかった。

二十二、三にはみえたが、かの女の態度には未婚者の生
硬さがなかった。四十女のような身のこなしであった。

——もしかしたら、母親ではないのか。あの年齢では、
幼い子供にちがいない。

しかし、これはすこし強引な想像のようであった。かの
女は、中肉中背だった。若い母親らしく、内部からあふれ
てくるようなゆたかさは感じられなかった。柏木は、漆黒
の髪の影響だけをあざやかにもっていたわけではなかつ
た。陶器のような肌の色を思ひだした。柏木はわずかな
時間に、いろんなものを見ていたことに気がついた。その
ひとつひとつが、強烈に思ひだされる。耳朶が大きかつ
た。青白くて、やわらかそうだった。柏木が思わず息をの
みこむ思いを味わったのは、その眸である。

柏木は、自分でも気のつかなかったおのれの趣味があき
らかにされたようで、にわかには信じられなかった。眸の
美しさについては、柏木もある意見をもっている。その意
見はどこにだしても、適正であることがみとめられるもの
だった。しかし、いくら端麗な眸にしても、好ききらいは
また別のものであることに気がついた。

——かの女の目尻は、どちらかといえは下っていた。し

かも、目と目の間隔がすこしはなれすぎていたようである。

その眸にはげしく惹きつけられたとなれば、それはもはや鑑賞の域を逸脱していることになるだろう。大きな眸だった。が、よく動くというのでもなかった。

——かの女は、洋装よりも和装の方が似合うのではない。八頭身というわけにはいかない。

ひとびとの中においてみれば、かの女はすこしも目立たない存在かもしれない。しかし、いったんその顔を知ってしまったえば、どこにいてもすぐ発見できる種類の顔である。

柏木は、東中野で下りた。ひろい通りを歩きながら、

——宿命的な顔というものがあるかもしれない。

柏木の考えは、そこにゆきついた。それで、一応気持がすんだ。顔は表面的なものであり、顔が問題にされるのは若い時代にすぎない以上、顔にこだわることは、片手落ちであるかもしれない。が、顔は心を鏡にうつしたものだということも、無視するわけにはいかない。

——宿命的とは、大げさだ。

しかし、それ以外に柏木はかの女からうけたふかい印象を適切に表現することを知らなかった。柏木は二十九歳の今日になって、ようやく自分の氣にいった顔を発見したことになる。柏木と表札のある石の門をはいった。門から玄

関までの植えこみは、いつもほこりをかぶっている。ひろい通りからすこしは違った場所なので、ほこりの舞いこむのは致し方がない。玄関の呼鈴を押す手の上に、表千家の茶の湯の看板がかかっている。柏木宗周の文字もずいぶん古びている。千本格子のガラス戸に人がけがうつり、女中のすぎが鍵をはずした。

「おかえりなさいませ」

「ただいま」

たたきに、七、八人の若い女の草履が行儀よくならんでいる。

——今日は、稽古日だったのか。

しかし、週五日、たたきには女性の草履がならぶのだが、いつも柏木がつとめからかえってくる時間には、みんながかえったあとである。うちの中には、若い女性の雰囲気がただよっている。茶席はひっそりとしていた。その廊下をとおるとき、

「ただいま」

と、母に声をかけた。

「おかえりなさい」

静かな母の声があった。茶席の静けさをすこしもやぶらない口調であった。その声のために、さらに茶席の静寂がふかめられたようである。